

<p>【基調発言】 中村GDO</p>	<p>基調発言テーマ：将来のオリンピック・パラリンピックに向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピック・パラリンピックのコアはいつの時代であってもスポーツであり、スポーツを通じた連帯や平和がベースになる。 ・こうした価値を世界に届けるために、変えていかなければならないところは、主に「簡素化・軽量化」「多様性」「参画」の3つ。 <p>【簡素化・軽量化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設と大会参加者をどうやって縮減するか。IFから様々なリクエストが来るが、極力既存の施設を変えない形でやるのが、コスト面だけではなく、持続可能な大会という意味でも非常に大事。IFとの交渉前に、IOC、IPC、開催都市、競技連盟と持続可能な大会とするため、施設に大きな変更を加えないコンセンサスを取ることがポイント。 ・東京大会でアジェンダ2020ができていますので、この更新版について大会ごとに合意を作っていくことが大事。 ・大会参加者の人数を減らすことで根底からコストを縮減することができ、非常に削減効果がある。東京大会は大会関係者を3分の1にできたが、コロナだから特別と片付けることなく今後のモデルにできればよい。大会参加者の縮減を大会直前にやるとコスト削減の余地が少なくなるため、早い段階でIOC、IPC等と合意し縮減することが大事。東京大会でリモートでも参画のしかた、大会の楽しみ方の選択肢は広がった。 ・開催地決定後も集約的な準備を短くする方がコスト節約になるため、最初はコンセプト作りや参画に注力した方がよい。 <p>【多様性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・賛成・反対の数字だけでなく、反対の方はなぜ心配しているか、賛成の方はどうして価値あるものとしているのか、お互いコミュニケーションを取って対応することが大事。 ・ジェンダーについても、選手の数だけではなく様々な取組ができた。厳しい意見があるからこそ大会の仕上がりはよくなった面がある。 ・子どもたちの多様性の学びの場になった。テレビを通じてみていただき、マスコット決定に全国8割の小学校が参画し色々な学びがあった。準備期間に積極的に関わることで、多様な価値観の子どもが多く育ち、社会の中核になり、多様な社会が構築される。これが最大のレガシーと感じ、2030年も引き続きできることを強く望んでいる。 ・次なるステップとしてオリンピック・パラリンピックをいかに一体化・融合化していくかが、多様性の観点からポイント。 <p>【参画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの方が参画し、色々なアイデアを出していただいて実現することが非常に大事。東京大会のメダルプロジェクトのような取組を2030年大会でもやっていただきたい。子どもたちの参画についても、スポーツを見て楽しむだけではなく、自分事として捉えてもらうのが非常に大きい。東京大会ではマスコットの選定、2030年大会ではイベントとしての参加ではなく、コンセプトづくり・企画段階から大学生・高校生に関わってもらおうと良い。 <p>【全体を通して】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「簡素化・軽量化」「多様性」「参画」を義務感でやるのではなく、前向きに2030年で取組むことで、北海道、日本、そして世界の持続的な発展の礎になるとポジティブに捉えることが大事。 ・オリ・パラが変わることで社会に新たな姿を見せることがもう一つの大きな側面。 ・東京大会を通じて、様々な社会の問題が出てきたところも含め、スポーツには社会を変える力があることを念頭に置いて招致・準備・開催の取組を進めていくことが大事。
-------------------------	---

<p>【基調発言】 慶應義塾大学</p>	<p>基調発言テーマ：「私たちが欲しい世界」とスポーツ：学生による東京2020大会持続可能性評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2013年には、サステナビリティは大会の一部と捉えられていたが、2021年には世界全体で取り組んでいくものに変化した。 ・経済成長、インフラ整備をスポーツで盛り上げる在り方ではなく、SDGsをどう社会として実現するか、環境や社会がより良くなるためにどうしたらよいか、更には市民が心身のウェルビーイングをスポーツを通じてどう盛り上げればよいかにフォーカスが移ってきた。もう一つは、大会の枠組みの中でネガティブな影響を減らすという守りのサステナビリティだけではなく、社会全体に対してどうポジティブな影響を創出できるか、攻めのサステナビリティが重要だと考える。 ・調査においては、目指すべき社会像を定義し、大会以前の状況を基にどのような大会であるべきなのかを議論した。結論として、東京大会の環境施策は一時的・限定的な対策にとどまっており、レガシーに繋がっていないと思うところがある。オリンピックを通じて、環境配慮の見せかけや大会開催時だけの解決ではなく、持続的な環境改善の仕組みを作りたい。 ・社会の分野では、マイノリティに関して自らLGBTQを公表する選手が増加し、メディアに取り上げられ認知が広がったが、日本での性的な多様性の認識の後進性も指摘された。一方で、参加選手の男女比の是正や男女混合種目の導入、JOC理事の女性比率や公正でインクルーシブな報道のためのガイドラインも定められた。 ・教育の分野では、多くの学校で視覚障がい者理解のための教育プログラムが実施され評価されたが、単発で終わらない継続的なサポートが必要との指摘もあった。 ・経済の分野のうち、観光についてはコロナの影響、大会の延期・無観客開催により、期待された観光者・観光消費の大幅な増大は実現しなかった。 ・交通に関しては、水素燃料車、水素燃料バスの導入等に進展があった。また、競技会場に隣接する鉄道駅のバリアフリー化や大規模な都市開発が進展した。 ・「私たちがほしい世界とスポーツ」について、3つのポイントでお伝えしたい。 ・自分と似た意見の人の声ばかりに耳を傾け、異なる立場の人への想像力を持っていない傾向が強まっていると感じる。自分の中にある偏見に向き合わなくてはいけない。誰かが排除されていないか確認する、他者を理解しようと歩み寄り姿勢こそがSDGsを実現する基礎。社会課題を人々が「自分事」として捉えられる大会を目指してほしい。 ・女性が男性よりも不利になる社会の構造が残っているのは、意識改革は到底進んでいるとはいえない。ジェンダーによる偏見や差別がない世界の実現、あえてジェンダーを取り上げなくてもよくなる未来を願っている。誰もがジェンダーを理由に判断されたり、嫌な思いをすることのない大会にして欲しい。 ・SDGsについて知ってはいるが特に共感しないという姿勢の人が多く感じている。個人レベルでは達成できないという諦めがあり、システムをデザインできていないのが現状ではないかと感じている。一人一人が自分だけの使命、役割、テーマを見つけ、それに対してアプローチできる世界を実現したい。アスリートのスポーツへの挑戦は、そうした一人一人の挑戦をエンパワーできるはず。スポーツを通じてサステナビリティとの出会いが生まれ、多くの人にとっての原点になればよいと考える。
--------------------------	--

各委員等の意見（発言順）

<p>牧野委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一般市民に入ってくる情報は限られており、目につく情報はマイナスなことが多く、オリパラのイメージも悪くなる。東京大会では経費の部分での追及ばかりされていたが、札幌で開催された際にはこのような報道がないよう、クリアなものを切に望む。 ・反対する人の意見として、オリパラより自分たちの生活を何とかして欲しい、除雪をもっとしっかりして欲しいというものがある。街の環境が変わることで、自分たちの生活にもプラスになることをもっと知ってほしい。除雪もオリパラ開催により改善されるだろう。 ・建物も目的や使う人がはっきりしていると作り方が大きく変わる。ただ街をバリアフリーにしようではなく、世界に誇れる環境のまちづくりを考えて行うのでは大きく違う。オリパラの開催により、街が誰でも住みやすい環境に変わることで、多様な人に対する理解が深まって心のバリアフリーが進むことに期待している。 ・オリパラの開催による良いところをもっと具体的に発信したら良い。環境と意識の向上、人の意識の向上、これが大きなレガシーに繋がっていくと感じている。
<p>太田（雄）委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ジェンダーの問題については、本委員会のような理事職は比較的女性を登用しやすいが、事務方の男女比は達成できていないことが多くある。 ・オリンピックの種目も男女比率をイーブンにすることはそれほど難しくはないが、組織委員会の職員をそうすることは難しい。これはトップの強いコミットメントが必要。 ・本委員会を何のために開催しているのか。1か月間の世界の動きがものすごく早い中で、我々が会議室の中でこういった勉強会をしていても世界の票は取れない、IOC委員の心は打てないということは今一度認識して、その上で何のために会議を開催するかを考えて欲しい。
<p>河合委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsや共生社会というものを当たり前な状態にするというゴールにまずBeingな状態を目指そうということをしかりと入れていきたい。 ・若者や子どもたちの「考え、気づき、身になる」そのものがレガシーとなり、日本・北海道・札幌をよりよくする大きな力になると考えた時に、市民・道民の皆さんも開催者であるという主体性を持っていただくような働きかけが必要であり、当然、子どもたちや若者たちが大会を開催する意義の議論にも加わっていくことがとても大切。 ・自分たちはこういう大会にしたい等、自分たちの言葉で発信する。そして、我々も一緒になって形にしたもので国内外にプロモーションしていくというプロセスを抜きにして取り組んでいては、理解を得ていくことは難しい。 ・子どもたちとポジティブな対話あるいはネガティブな意見も含めて受け止めながら、北海道・札幌でオリパラが開催されることを通じて、皆さんにとっても社会にとってもより良くなっていくことを実感できる夢や希望を共有できるようなコンセプト作りに取り組まなければならない。

荒井委員	<ul style="list-style-type: none"> ・若者がもっと参画することは本当に大切なこと。高校生に議論に参加してもらうとなれば、札幌市は中学3年生が毎年1万3千人程いるため、8年間毎年積みあがっていくと10万人以上の若者たちが招致に関わってきた経験を持つことになる。そのような方たちが、大会開催時にもう一度集まり、一緒に盛り上げていくことも大事なプロセス。 ・同じ世代の札幌の方達と話しても、全員がウィンタースポーツを楽しんでいるわけではないという意見があった。スポンサー企業の方も、競技によっては観客が多いと言えない状況があることについても、少し疑問を感じているところがあり、スポンサー側や競技者のためだけのスポーツになりすぎていないかを感じる方もいるようだ。 ・スポーツの本当の良さは、アスリートの方がいて成り立つが、同時に、本気でアスリートを応援することを通じて私たち普通の人も色々学ぶ。 ・競技者だけではなく、周りで盛り上げる、応援をすることを学ぶこともひとつのレガシーとして大切だと思う。 ・ゆくゆくはアスリートだけではなく、北海道・札幌はチャレンジする人たちをいつでも応援するというカルチャーが根付いていくことがレガシーとしてとても大切。
永瀬委員	<ul style="list-style-type: none"> ・大会を開催しようとする、どうしても大会中をどうするかというところに力や視点が注がれ対応するが、大会が終わると結局元に戻ってしまうことが往々にしてある。 ・大会中だけではなく、今からできるものをしっかり作っていくことがレガシーになると思う。 ・レガシーといっても色々な意見や説明があり、それを市民・国民に伝えようと思った時、「レガシー」という言葉の受け取り方は様々。 ・どう伝えていかもこの委員会や招致の動きの中では大事になってくるが、一人一人説明することはできないので、メディアを通してどう伝えるかということが一番大事。 ・2030大会のキーワードがないので、費用の面しかメディアとしても注目しづらい。CM15秒や新聞の見出しのように、常に目に飛び込んでくると関心をもってもらえる。 ・SNSをもっと効率的に活用すると良い。Z世代、学生の声を聞き、どう効果的に「いいね」が増えるかを聞くことも良い。様々なSNSを活用し輪を広げることが重要。
伊達委員	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾大学の基調発言にあった「未来からの留学生」という言葉が、今回の招致、もしくは札幌で開催する意義に関しても非常に繋がるキーワードになると感じた。 ・大会が開催される8年後、もしくはその先の未来のために何をするのかという未来志向で、今提示しなければいけないことをもう少し考えていく必要がある。札幌の未来をどのように変えていくのか、8年後、その先の10年、20年、30年がどのように変わっていくのかを考えたうえで目標設定をする必要がある。 ・SDGsに関しては、具体的に何をどうしたらよいか理解している都市は少ない。札幌で何をするか具体的に示さなければ共感を得られない。例えば脱プラスチック等。 ・そのためには必要な投資があることも理解したうえで、全体のコストの在り方が、従来の施設や競技場等、見栄えするようなものを中心とするのではなく、より快適に社会と共生するようなところに投じていくことを示していく必要がある。 ・また、レガシーという言葉が共通の理解になっていないのではないかと感じている。大会のためにやったことが、将来も持続的に活用されるようなハード、ソフト、メンタル的なものに投じられるすべてが札幌でオリンピックを開催するレガシーに繋がっていくというようなストーリーができないかと思っている。
菅谷委員	<ul style="list-style-type: none"> ・レガシーの中心にあるのが、SDGsであると感じた。 ・東京2020大会の取組で「オリンピック・パラリンピック等経済界協議会」があり、招致機運醸成のためスポーツの普及や障がい者スポーツ支援等に取り組んだ。 ・この取組を今からでも行い、日ごろから日本はSDGsに真剣に取り組んでいることを表していくことがプロモーションになるのではないか。
日比野委員	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾大学の基調発言の中で、「システムをデザインできていない」というご意見に共感した。 ・色々な社会貢献を考えていくとき、どうしても具体性に欠けてしまうことがあり、一過性のものも多い中で、将来的にサステナブルな社会を作っていくためにはきちんとしたシステムデザインがないと確立できない。 ・例えば環境で再生可能なペットボトル以外は大会での利用を認めないという姿勢を見せていくことも重要。スポンサーにも求めていくという姿勢を持っていても良い。 ・若者は様々なアイデア、柔軟な姿勢、考え方を持っているため、例えば、大会に向けてのアイデア・コンペティションの開催や、実際に参加してもらう機会を作り、若い人たちを参画させていく仕組みを作ることも大切。 ・レガシーの研究において、障がい者のボランティアは満足度があまり高くないのではないかと指摘している論文がある。ただそこにいるだけではなく、きちんとした意見を入れていく。障がいがあってお困りですかという話を聞くのではなく、そういった方がメンバーとなって話をできる仕組みをきちんと作らなければならない。 ・例えば、女性や障がい者が数合わせではなく、きちんと意見が入っていき、参画できるものを作っていくと単なるきれいごとのイベントに終わってしまう可能性がある。
マセソン委員	<ul style="list-style-type: none"> ・レガシーを残す際、誰も取り残されていないという点が大事。ありのままの自分たちが認められて、誰もが自分の可能性に挑戦できるような環境づくり、その歩みを止めないということがレガシー作りとしてとても大切。大会招致を目指す中で、社会的に弱い立場に置かれていた人たちが、社会の中で力を獲得していくことが実現したら良い。 ・同じ場所にいるだけで満足するのではなく、きちんと自分たちも参画している、居心地が良い活躍できる土壌が整っていることを丁寧に目指していかなければならない。 ・障がいの有無に関わらず、自分たちで色々なことが一人でできるという環境を整えていくことの必要性をすごく大事にして欲しい。 ・日本は障がいがある人が来た時にだけ対応すればよいということがよく見られるが、欧米のように区別した対応をする自体がおかしいという考え方も広まっていくとよい。 ・全ての人が住みやすい社会を作るためには、少しずついろいろな人たちの自由を担保しながら、少しずつ自分も我慢しなければいけない部分があるが、レガシーを考えていくというところで、一度立ち止まって取り残されている人がいないかということを中心に考えながら、進んでいっていただきたい ・招致応援大使には一人も女性が入っていないので、ぜひ女性アスリートも追加して一緒に活動していただきたい。

荻原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・長野の4つのレガシーであるが、一つ目は「施設」。市内6つの競技施設が、市民体育館やプロバスケットチームのホームアリーナ、市民が1年中楽しめるプール、野球場、大型コンベンションやコンサート会場、中学校のスピードスケート全国大会等で活用され、2030年大会で使用予定のものもある。 ・ワクチン会場としても使用しており、大勢の人の流れに対応する際にも、若い頃にオリンピックを経験した職員の知見が活かされていることもレガシーのひとつ。 ・二つ目は「文化」。施設を有効活用しながら全国大会、国際大会を誘致しており、市民のスポーツ文化度を非常に高めている。長野オリンピックを契機に始まった「一校一国運動」は、IOCの教育的プログラムに活用されている。また、ボランティア文化も非常に深まってきている。 ・三つ目は「知名度」。オリンピックの効果により海外旅行者は非常に多くなり、街の大きな経済効果を生んでいる。 ・四つ目は「市民の心」。2018年に世論調査協会が行った調査では、オリンピックは9割、パラリンピックは8割の方がやってよかったと、非常に高い数値。 ・若い世代は直接的に大会を経験してなく、良さや意義について非常にわかりづらいとの話があった。札幌招致が実現したら若い世代が直接触れ合う良い機会になる。 ・札幌ではノルディック複合競技を実現していただきたい。各国で複合女子選手の育成強化に取り組む中、日本は進んでいる。今シーズンのナショナルチームの女子7人中5人が北海道出身。2030年で競技が実施されればメダルの可能性が非常に高く、機運醸成に活用しながら、オリンピック種目として継続される環境も作っていただきたい。
遠藤特別顧問	<ul style="list-style-type: none"> ・全体として盛り上がりはまだ欠けている。日本全体に2030年の札幌招致というイメージがまだほとんどないことを危惧している。 ・長野オリンピックでの一校一国運動が、東京2020大会時にはホストタウンという仕組みで継承された。若い人たちに招致の思い・広がりを作っていく取組がなお一層必要。
井本委員	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の部分に目を向けて前面に出し、何がいけないのか、何を变えなければいけないのかを明確にすることが必要。 ・海外で生活をしていて感じるのは、日本は他人事・無関心であるということ。心配ごとや課題をもっと前に出していくべき。 ・2030年に向けて大切なレガシーは気候変動。パラダイムシフトは2030年までの間にも起こりうる。気候変動はレガシーとして一番前に持っていかなければならない。 ・会議の進め方について、各委員の意見を事務局が持ち帰り、練るという形ではなく、もう少し対話的で、双方向でキャッチボールできる対話、意思決定ができればよい。
高橋委員	<ul style="list-style-type: none"> ・2030年の北海道・札幌大会は、1972年に一度オリンピックが開催されていることを踏まえるとパラリンピックの開催がより重要性があると思う。 ・世界から訪れる様々な方々にユニバーサルに活動してもらうため、全ての方々にやさしいまちづくりという観点ではインフラ整備は視野に入れなければならない。 ・開催都市のありのままを最大限に活用しながら、どのように調整、調和していくのかということを実現論として考えていかなければならない。 ・そして、ハード面の整備を補完するのが、我々の意識・心であると思う。みんなで支えていくという意識を強く持っていかなければならない。
本橋委員	<ul style="list-style-type: none"> ・この会議の本来の形として、一方通行にならず議論に対して会話形式でできるように立て直していくことが一番だと感じた。 ・道民として、盛り上がりが足りていないと感じている。 ・選手たちが人の心を動かすエネルギーは招致段階では生み出せないが、招致は計画的に人の心を動かしていかなければならない。 ・道民・国民に対して、情報開示が求められると思うが、オリンピックを活用して自分たちがより住みやすい街や国にしたいというような話し合いができればよい。
三屋委員	<ul style="list-style-type: none"> ・基調発言を聞き、東京2020大会をしっかりと考察することは大事な作業と感じた。またZ世代の考え方がすごく面白い。 ・東京にいと、2030年大会の招致を目指しているということが感じられない。 ・デジタルネイティブな世代の人たちにどんどん発信してもらえばよい。若い方々の発信力はすごく大きいため、参画してもらうことは大賛成。 ・オリンピックに対するネガティブな意見を言われるのは嫌であるが、タウンミーティングのような形でどんどんネガティブな発信をしている人たちに説明をしていってはどうか。
小玉副知事 (鈴木副会長代理)	<ul style="list-style-type: none"> ・若い人の新鮮な発想、バックキャストの考え方が非常に重要。子どもたち、学生が議論に参加できるような工夫が必要。 ・2030年に向けて、競技力の向上、それを支える環境づくりは、一つの重要な戦略になる。 ・ホストタウンの取組に加え、各学校の創意工夫による各国との交流を喚起できれば良い。 ・ICT技術の進化により新たな対話や観戦等が生まれ、子どもたちに交流と挑戦をすることの価値を知ってもらいたい。 ・2030年はSDGsのゴール年であり、同時に新たな扉が開かれる節目の年。環境問題や共生社会の実現など、世界共通の課題解決に向けた多様なムーブメントが北海道で繋がり、発信することにより、新たな持続可能な価値を創造する潮流を後押しできることに期待している。
森副会長	<ul style="list-style-type: none"> ・ネガティブな意見をお持ちの方にしっかりと説明し、賛否の数字だけでなく、具体的に反対の裏にある理由をしっかりとつぶしていくことが大事。
秋元会長代行	<ul style="list-style-type: none"> ・若い世代の方々に自分事として参画してもらうことが重要。 ・若い世代が特に関心の高い、SDGsや環境問題について、プロジェクトとして参画できる仕組みにも取り組んでいきたい。